

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 101 回 山口百恵は菩薩である

山口百恵・三浦友和が主演したテレビドラマ「赤い疑惑」が、30年ぶりにリメイクされる。百恵ちゃんの歌が、複数のアーティストによってCDリバイバル発売が決定した。世の中再び、何となく「百恵ちゃんブーム」で、密かに大喜びしている小生である。

実はあの一連の「赤い」シリーズ、昭和49年当時、東京・成城の某ハウスメーカーの住宅展示場で、毎週水曜日にロケしていたと記憶している。その展示場の、道路を挟んだ向側の喫茶店、確か名前は「アヴェニュー」と言ったかもしれない、その2階で、一杯のコーヒーをすすりながら3時間、毎水曜日に粘り続けたのを、懐かしく思い出している。

当時は、バブル絶頂期、高度経済最高峰に向かい、日本経済全体が地吹雪を上げ突進している...そんな時だった。昭和46年、大学の学食で、初めて食べたスパゲッティが80円、紅茶は20円だった。卒業間近、バイトしていた喫茶店でのナポリタンは、確か180～200円だった。好景気を反映してか、物価の上昇も激しく、誰もが、インフレに慣れきっていた。大学の学費も4年間の間に2回上がったが、幸い、それほど駄々をこねることなく、小遣い(生活費)も上がっていたと思う。

東北沢のガソリンスタンドで1日バイトし、500円もらって、成城学園駅そばの飲み屋街へ直行、その一角に、ばあさんが一人でやってるおでん屋へ。おでん数品と、「金盃」という銘柄の二級酒3杯、キムチをつまみ、ほろ酔い加減。500円で十分足りた。

今考えると、とても信じられない時代が、極、最近まで現実にあったわけで、現状のアジア周辺国を笑える立場にないこと、改めて実感する。

百恵ブームがなぜ今なのか？ そういえば、「赤い」シリーズの大ヒット作「赤い疑惑」は、この間、話題となった韓流ドラマ「冬のソナタ」と、そのストーリーはほぼ同じフィールドにある。「二匹目のドジョウ」的思惑は否めないが、彼女の歌や、その生き方までがブームの兆しにあるとすれば、やや複雑な思いであろう。

「百恵は菩薩である」...当時そう言い切ったライターがいたが、百恵ちゃんがあの時代の象徴であったのかもしれない。物的裕福さの醍醐味を、我々庶民にまで味わせてくれた、一時の幸福感への懐心の情(懐かしさ)。そして、何時までも未練がましく、過去の栄光に頼らない、見事なまでのリタイヤメント。日本人らしからぬ、一種の「かっこよさ」は、羨望に近いイメージを発している、百恵流への再評価であるかもしれない。

いやいや、そんな理屈っぽくなく、素直に喜んでいる「百恵教徒」は、これを機会にもう一步、新たな歩みをチャレンジしてみたいくなる...団塊世代のみならずとも、日本中がそんな「元気」を取り戻すことができれば、やはり百恵ちゃんは菩薩である！！